

幕末明治の肥前の群像 1

sueoka akemi

輸入たばこで財を成した 江副廉蔵

明治維新以降、日本は近代化に邁進した。この時期の近代化とは西洋化のことである。

日本人は無類の煙草好きで細く刻んだ煙草葉をキセルに詰めて吸っていたのだが、洋服にキセルは似合わない。そこで紙巻煙草の需要が出てきた。この煙草の輸入で莫大な財を築いたのが江副廉蔵である。

江副廉蔵は1848（嘉永元）年、佐賀藩士江副空之進の次男として生まれ、幕末に長崎にあった致遠館でフルベッキに学んだ。

1876（明治9）年にはフィラデルフィア博覧会に香蘭社の通訳として同行し、博覧会終了後ニューヨークの商況を目の当たりにして帰国した。1878年には三井物産ニューヨーク支店主任として渡米し貿易に従事した。

1885年、東京銀座に米国煙草直輸入店を開店する。当時、不平等条約により輸入品の関税は低く、安くてうまい米国煙草ピンヘッドは特に庶民に広く浸透し莫大な利益をもたらした。1899年、アメリカタバコ社と京都の村井兄弟社が資本提携すると廉蔵の江副商店はその傘下に組み入れられた。煙草が専売制となったのは1904年で、その大きな理由は日露戦争の戦費調達のためである。当時全国には大小五千もの煙草業社があったという。このとき廉蔵は自らの富の源である煙草の利権を政府に差出、更に国会に建議し失業した煙草業者の救済にあたらせた。

廉蔵の姉美登は大隈重信の妻であったが、重信が新政府の要人となって上京する時に離縁した。しかし、廉蔵は終生大隈重信と深い交流があった。また、姻戚には伊藤博文、児玉源太郎、夏目漱石、日下部三九郎がいる。1920年、廉蔵が没した後、昭和恐慌にのみ込まれ江副商店は倒産した。虎ノ門にあった廉蔵の住居の跡には現在ホテルオークラ別館が建ち、鹿島市音成の廉蔵、美登の実家跡に建つ小池家は今も江副と呼ばれている。

デザインを「図案」と造語

納富介次郎（1844~1919）

開国を余儀なくされた幕府は、遅ればせながら1862（文久2）年、国際市場の調査のために貿易船「千歳丸」で遣清使節団を上海に派遣した。一行は水夫まで入れて総勢51人。佐賀藩からは幕臣の従者として納富介次郎、深川長右衛門、山崎卯兵衛、中牟田倉之助が参加し、同行者には長州の高杉晋作、薩摩の五代友厚もいた。

彼らは上海に2ヶ月間滞在し、亡国の危機にある清国の実情と西欧列強の国力を目の当たりにして藩を超える国民意識を強くし、日本を取りまく情勢への危機感を抱いて帰ってきた。

納富介次郎は、小城藩の柴田花守の次男に生まれ、佐賀藩士の納富六郎左衛門の養子となり、上海を見聞したときは18歳であった。

1869（明治2）年、介次郎は、佐賀藩が幕末から貿易推進のためにつくった佐嘉商会の顧問となり、大阪で昆布・雑貨を上海に輸出し、横浜で貿易の実務を学び、国を富ませる貿易品は何かと考えた。そこで彼は、生糸、茶、織物など原料の貿易は資本力さえあれば誰にでも出来ることと考え、普通の商人ではできないことを模索し、日本人が手工芸にたけていることに注目し、美術工芸品や各種雑貨の貿易を目指した。

1873（明治6）年に開催されたウィーン万国博覧会のテーマが「デザイン」で、これに対応する日本語が緊急に必要となった。その際、画家出身の官僚であった介次郎が「図案」と造語した。

現地に派遣された介次郎は万博終了後、伝習生としてボヘミア（現在のチェコ）の製陶所で技術を習得し、ヨーロッパの工業を視察して帰国した。1876年の米国フィラデルフィア博覧会にも事務官として現地に派遣され、審査官に任命された。

しかし、介次郎の主眼は日本の産業技術の向上にあった。官を捨てて工芸・工業教育の必要性を主張し、石川県立工業学校、富山県立工芸学校、香川県立工芸学校、佐賀県立有田工業学校を次々と設立。数多くの工芸家・美術家を育てた。

幕末の納富介次郎の上海見聞録「上海雑記」は1946（昭和21）年に「文久2年上海日記」に収められ、はじめて世に出た。

幕末のパリに死す

野中元右衛門（1812~1867）

日本が初めて参加した国際博覧会は1867（慶応3）年のパリ万博である。この時、幕府の出品参加の要請に応じたのは薩摩藩と佐賀藩だけであった。佐賀藩からは小出千之助、佐野常民、藤山文一、深川長右衛門、野中元右衛門が現地へ派遣されたが、野中元右衛門はパリに着くや否や客死し、ペールラシェーズ墓地に葬られた。

元右衛門は1812（文化9）年に生まれ、その前半生は母の実家である佐賀城下材木町の烏犀圓本舗の、七代目野中源右衛の補佐を余儀なくされた。長崎に出て貿易に従事し、佐賀藩の代品方に接近して用達商の一人としての目覚しい活躍が始ったのは彼が45歳の頃からである。

当時の藩内には輸出向けの物産は少なく、商売はほとんど輸入であったため、佐賀藩が長崎警備上必要とした巨額の海軍費、軍艦代の支払いは困難を極めていた。藩主鍋島直正は熟考の末、従来のオランダ相手中心を改め、英米各国との取引を促し、藩内には各種産業の勃興を期待した。この時、最も活躍したのが野中元右衛門であった。

彼は最良の釉薬が取れる日向の深山に産する柞灰(いすばい)と薩摩の堅炭を輸入し、有田焼の品質を高め輸出した。当時、古川彦兵衛という卓越する才智と策略で五島沖で密貿易を行なう巨商がいた。元右衛門は大隈重信らとともに、多くの人から敬遠されていた彦兵衛に接近し、師と仰ぎ長所を取り入れ短所を補い、富を蓄積した。そして藩に多額の献金をしたため、士分に取り立てられた。一方嬉野茶の販路拡張も計った。元右衛門の没後、1873（明治6）年のウィーン万博に茶商として参加した松尾儀助が、大恩人である元右衛門の墓参りにパリへ行ったところ、墓は壊れていた。それは1871年のパリ市民の蜂起により樹立した革命政府パリ・コミューンが瓦解する時、ペールラシェーズ墓地で大規模な戦いがあったためである。儀助は墓を大理石で再建して帰国した。

佐賀大学正門前にある善定寺には野中古水（元右衛門）の顕彰碑があり、隣にある野中家の墓には遺髪が納められている。また、武雄市の如蘭塾の設立者野中忠太は、元右衛門の孫に当たる。

夢は5大州を駆けめぐる

久富与平昌起

(1871没 享年40歳)

17世紀はじめに誕生した有田焼は、1650年ごろからオランダの東インド会社によって伊万里港より輸出された。輸出総数は数百万個といわれ、欧州全土を席卷した。しかし、18世紀中盤に輸出は途絶える。

肥前の焼き物の貿易が有田の富商久富与次兵衛昌常によって再開されたのは1841（天保12）年。久富家は鍋島閑叟から屋号の蔵春亭を拝受し、1853（嘉永6）年には長崎に蔵春亭支店を設立した。店は佐賀藩の事務所としても使用され、大隈重信や江藤新平らも出入りしていたという。

その与次兵衛昌常の六男が与平昌起。長崎の店を任され貿易の第一線に立った与平は、英国人トーマス・グラバーと親交を結び、炭坑の共同開発にも着手した。彼等が開発した炭坑は、後に三菱に引き継がれた高島炭坑である。

1866（慶応2）年、与平は小城藩主鍋島直虎に建言し、米国ボストンで建造された200tの汽船ドルフィン号を2万3千ドルで購入させた。これが「大木丸」である。

与平はこの船を操り、上海へ陶磁器、和紙類、松板、石炭等を輸出し、帰りには新式の武器を輸入するなど、藩のため東奔西走した。

明治になり、新政府の要人となった江藤新平は、旧知の与平に東京府知事就任をしきりに勧めたが、与平は固辞した。海運と貿易を開始し五大州を廻らんと望んだからだ。

1870（明治3）年の晩秋、与平を乗せた大木丸は千島沖で台風に遭って難破するという事故が起る。船は半年余も島から島へ漂流したといわれている。与平は遭難した船中で病に倒れ「遺体は海中に投ぜよ。死後長鯨に跨って初志を遂げん」と言い残し世を去ったという。1871年6月、享年40才だった。

後に大隈重信は「長命であったなら三菱以上の事業を成しとげただろう」と与平のことを回顧している。

現在、有田町稗古場の報恩寺境内には鯨をかたどった台座の上に与平の碑が建っており、与平の師であった谷口藍田の碑文が刻まれている。

幼くして実母と離別

大隈熊子

(1863~1933)

大隈熊子は佐賀が誇る偉人の一人、大隈重信の娘で、母は江副廉蔵の姉美登である。

幕末に活躍の目覚しかった重信は、明治元年に新政府に請われて上京した。このとき美登が佐賀に残ることを決意したため、重信は上京の翌年、旗本の娘三枝綾子と再婚した。

重信の母三井子は、美登を鹿島藩御茶屋敷の犬塚綱領と再婚させた後、数え年9歳になった熊子連れて、長崎からアメリカの汽船に乗って東京へ向かった。以降、熊子は重信夫妻のもとで伸びやかに成長した。

1879（明治12）年、熊子16歳で南部英麿を婿養子に迎えるが、1902（明治35）年、事情があって（英麿が保証人となり多額の借金を背負ったため）離縁せざるを得なくなった。以降も熊子は大隈家にとどまり、重信夫妻を支え、同時に広く万人への心配りを忘れず一生を過ごしたという。

熊子は1933（昭和8）年、70歳で亡くなったが、自分に関する資料一切を破棄、何も残していなかったという。残念に思った人たちが、熊子の記録を百年後に伝えようと、熊子に関することを収集し『大隈熊子夫人言行録』をまとめ、亡くなった翌年発行した。

熊子は政治、芸術、社会全般に対し高い見識をもっていたようで、犬養毅は「男であろうものなら老侯（重信）よりは偉かったろう。政治家としても実業家としても大きなものになったろう」と語っている。

才覚に恵まれながら女性であるがために家庭の犠牲になった熊子に、周辺の多くの人々が同情を寄せるとともに、熊子の生き方を女性の美德とも考えていた。

大隈重信は女性も大いに才能を開花すべきと考えていた。例えば日本女子大学創立に際して、同大学の創設者となる成瀬仁蔵を励まし、女子の高等教育機関を創る意義は大きいと自ら設立委員長となり、早稲田がおろそかになるのではないかと周りが心配するほど熱心に計画を推し進めている。その胸中には、熊子への思いがあったと考えられる。

岩倉使節団の報告書を執筆

久米邦武

(1839 (天保10) 年～1931 (昭和6) 年)

明治新政府は、欧米諸国から近代国家建設の方法を学ぶために、政府のトップや留学生を海外に派遣した。これが、フルベッキが大隈重信に提言し実現した岩倉使節団である。

1871 (明治4) 年11月、日本を出発した岩倉具視を正使とし、木戸孝允、大久保利通、伊藤博文、山口尚芳の4人を副使とした使節団一行は、世界を一周し、1年10ヶ月後の1873年9月帰国した。

佐賀藩出身の久米邦武もこの視察団に随行し、その報告書『米欧回覧実記』を執筆・編集した。これは、挿絵入りの全5冊の本として1878年に刊行され、ベストセラーとなった。

明治政府は、久米の功勞に対し、当時としては破格の500円の褒賞金を与えた。久米はこれを元手に、目黒に5000坪の土地を買い別荘を建て、余ったお金で息子桂一郎をフランスに留学させ、絵画を学ばせている。

また、帰国間もないころ、久米は旧知の有田の八代深川栄佐衛門に「欧米にはカンパニーというものがある。同志で資金を出し合い、一個人では成し得ない大きな事業を行うためのものだ。近年、欧米の産業が急発展したのも、このカンパニーが原動力である。」と土産話をし、「来る米国建国百周年記念のフィラデルフィア万博に、有田の力を結集してみてはどうか」ともちかけた。

これを聞いた栄佐衛門は有田の仲間たちと合本組織香蘭社をつくり、博覧会に出品し、アメリカで有田の焼き物が大好評を得ることとなった。

また、1891年 (明治24) には「神道は祭天の古俗」という論文を発表し、神道家や国家主義者から強い非難を浴び、帝国大学教授を辞した。

その後、悠々自適の研究生活を送っていたが、後に東京専門学校 (早稲田大学) によばれ、再び学究生活を送ることとなり、1931 (昭和6) 年、93歳で世を去った。

久米邦武が手に入れた土地の一角、東京目黒の駅前には、現在、久米ビルが建ち、その8階にある久米美術館には、久米父子の作品や資料が展示されている。